

特集 1974→2024 創立50周年まであと5年

好きです。勝手な解釈。「人は生まれて大人になって、いろんなご縁を頂いて生き長らえていく。その歩いた道は一人一人において決して平坦なものではない。社会の一員としての責任、男と女のやりとり、いろんなことが毎日、代わる代わる身に迫る。その内、親が死んだり、病気になるったり、気が付いてみたら、とほとほ歩かしくない自分がある。私というこの旅は何時まで続くのだろう。峠道に差し掛かってふと

「杖言葉」に
支えられて

①この旅、果てしない旅の
つくつくぼうし「山頭火」

立ち止まったら、近くの杉林からつくつくぼうしの啼く声が喧しいこと。何時までもここに留まるわけにはいかない。一休みしたら遙か彼方に見えるあの山に向かって歩もう」。

山頭火の生きた時代は戦争の時代である。その時代と今を単純に比較することは出来ないが、今の時代、今の時代の困難さが表出している。立ち止まって、目の前の3月の山を見ながら溜め息をついている。当園はあと5年で創立50周年に辿り着く……。

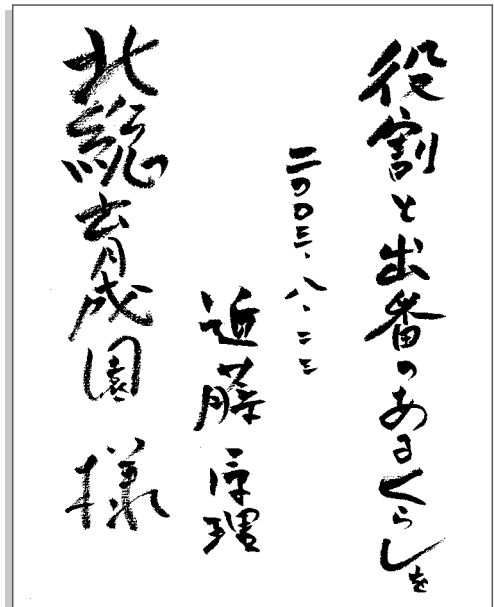
②大変さを楽しむ
ゆとり・夢・ユーモア「近藤原理」

上記、山頭火の句は昭和10年、九州長崎平戸道で詠まれた。その平戸で生まれた近藤原理先生。原理先生の偉業は読者諸氏が知るところである。佐世保の隣、佐々町の自宅を開放。奥さんと二人の子供さんのいる暮らしの中で約30年



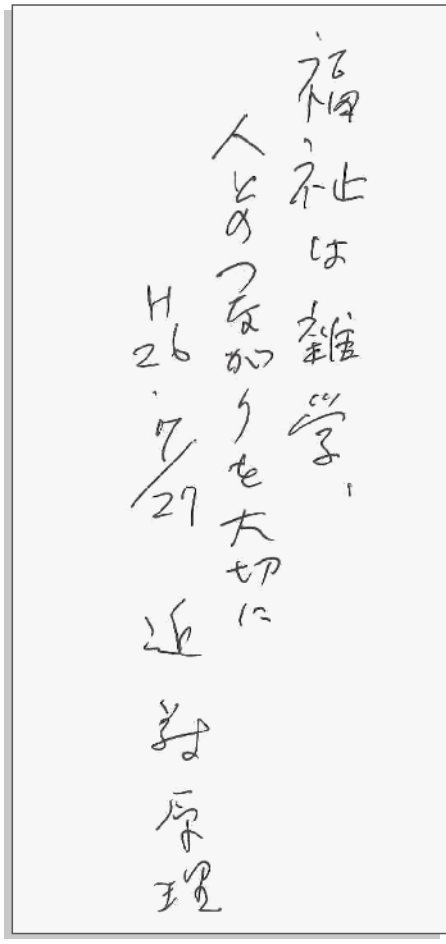
発行日 2019. 3. 25
第 241 号
(第 1 回発行)
1974年4月1日
発行所 北総育成園
千葉県香取郡東庄町
笹川い5852
☎ 0478-86-3003
FAX 0478-86-3295

北総育成園のホームページが
新しくなりました！
施設の概要や理念、利用者の様子、
園長からのお知らせ等、盛りたくさん！
ぜひアクセスしてみてください。
ホームページアドレス
<http://www.hokuso-ikuseien.org/>
Eメールアドレス
hokusoikuseien@e-sazankakai.or.jp



役割と出番、あざむきを
Hokuso Ikuseien
近藤原理
北総育成園様

以上、10〜20人の障害を持った人たちの共同生活。その暮らしの体験の中から紡ぎだされるこの人たち(障害者)を大切にする言葉(考え)を発信し続けた。それは多くの著書、なずなの日々、地域で障害者と共生50年、等に詳しい。原理先生は平成29年に亡くなられた。今、日本の国は人口減少で苦しんでいる。私たちの福祉は人でしか解決できない。それを支えてくれる人の確保に苦慮している。原理先生の著作から発信されている言葉を「杖」に、老いを支え合い共に生きるこの道を歩む……。一期一会一輪の花。(武井)



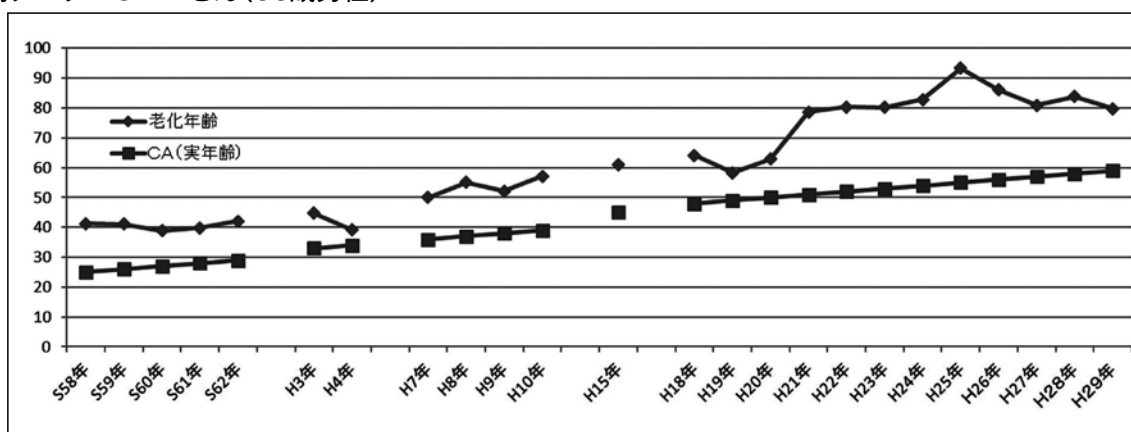
北総育成園様
近藤原理
H26.7/29

測定検査35年の継続から見えたこと～

(コメント)

3ページのグラフは北総利用者の年度ごとの平均年齢と平均老化年齢の推移を表している。被検査者の人数はほぼ同数であるが、入退所した利用者も含まれている。昭和49年定員50名で調査が始まり、平成元年以降定員75名となる。利用者の入所・退所がある為、毎回同じメンバーで調査している訳ではないので、どうしても誤差は生じてしまう。グラフよりほぼ全ての年において、老化年齢が実年齢より10歳以上高くなっていることがわかる。ほぼ同じように老化してきた利用者の様子が読み取れる。しかし、利用者平均年齢が50歳を迎える平成22・23年頃から老化年齢が大きくあがり、ここ数年で利用者の老化が大きく進んでいる事が数値からもはっきりわかるものとなった。この調査結果から今後、より高齢となった利用者に合わせて支援が必要である事が見てとれる。

②個別データ S・Hさん(56歳男性)



(コメント)

S49年の入所以来、農耕班に所属し鋤使いの名人であったSさん。加齢に伴う身体機能の低下が顕著であり、H30年よりありのまま工芸班で作業をしている。加齢と共に老化度も上がっていたが、50歳を過ぎてからは急に老化度が高くなっている。近年は目のくぼみや欠歯、脊柱前屈が目立つ。歩行面では足を引きずるように歩いており右足の変形も進んでいる。歳を重ねるごとに歩行が大変になってきている。

4まとめ

今回、長い間のたくさんのデータをまとめ、浮かび上がった事は50歳から60歳という年齢が大きく変化(=老化)するターニングポイントだということだ。検査開始時から実年齢と老化年齢がほぼ一定に上がっていく状態だったが、平成20年あたりから一気に老化年齢が上がっている。個人の記録からも、50歳を過ぎた頃から老化がぐんと進んだ人が多い。

「髪が薄い」「歯がない」「腰が曲がる」等の検査項目は一つでも該当すると老化度の数値に大きく影響してしまう。現在の入所利用者を見ると、歯がなくなって食事形態が変わった、腰が曲がった、歩行が困難になってきたという方が年々増えてきている。その点からも、老化度は高くなり高齢化が進む現状を感じる。実際にここ2、3年で一気に老化が進み生活がガラッと変わった方もいる。自分の足で歩いていた方が車椅子を使うようになり、外で元気に働いていた方が室内作業班へ移ってと年々、高齢化・老化という現実に向き合い「働くこと生きること」の暮らしを続ける為に職員が考える事・努力する事が増えてきた。

全ての生き物は『歳をとる』ことから逃れられない。「老けた、衰えた」と後ろ向きにとらえてばかりでなく、誰しも来る「老い」に向き合いながら北総の暮らしでしか刻めない歴史を重ねていく事が大切なのだと思う。若い時は朝から晩まで畑仕事をした、しっかり歩いて原木を運んだ、運動会で走っていた……、そんな時代もその人の生きた証、歴史として大切にしつつ「その人らしい」人生後半の生き方を共に考え、支援していく事が北総職員として大切なのかと思う。

(研究委員会 加瀬)

老いを科学する ～尼子式老化度

❶はじめに

北総育成園は創立40年を過ぎ、利用者さんも歳を重ねてきました。入所当時は20代、30代と若く働き盛りの方が多くいましたが、北総の「働くこと生きること」の生活を送り続け、年を重ねるごとに大人の顔つきになり、それに伴い白髪やしわが増えてきました。その歳を重ねていく姿をチェックし、老化の様子を記録していく検査が「尼子式老化度測定検査」です。北総では昭和55年を第1回目とし、第1回目の検査者である園長がこだわって長い間継続してこの検査を続けてきました。今回は35年間の記録をまとめ、北総での利用者の老化の推移を目に見える形にし、この人達にとっての「老い」「歳を重ねること」について考えてみました。

❷尼子式老化度測定検査とは

昭和26年(1951)に尼子富士郎氏によって考案されたものであり、老化を外見上からとらえ、点数で示そうとする試案が基になっています。北総での検査は昭和55年(1980)から開始されました。この尼子式老化度測定検査は、老化状況を見た目や触れることでチェックしていく為、評価基準の具体性を欠き、それ故、測定者の主観が入り易く誤差を見込んでおく必要がありました。具体性に欠ける検査故に、ここにある程度明確化されないことには誤差も大きくなり信憑性の低いものになってしまう可能性が多分にありました。実際、当初の5年は測定値のばらつきや異常値が出てしまい途方にくれました。そこで現在、使用している測定方法は武井園長が昭和59年(1984)にその尼子富士郎氏の試案に基づき北総独自の測定評価基準を作り、それを基にしたものです。そして、以後35年間継続されています。

「皮膚のしわ」「毛髪の状態」「歯」・・・といった部分について

- 2 → 著しい老化が認められる
- 1 → 老化傾向が認められる
- 0 → 老化は認められない

以上の3ランクの得点化をし、その得点から外見上の老化度(指数)を出し、老化年齢を出していきます。

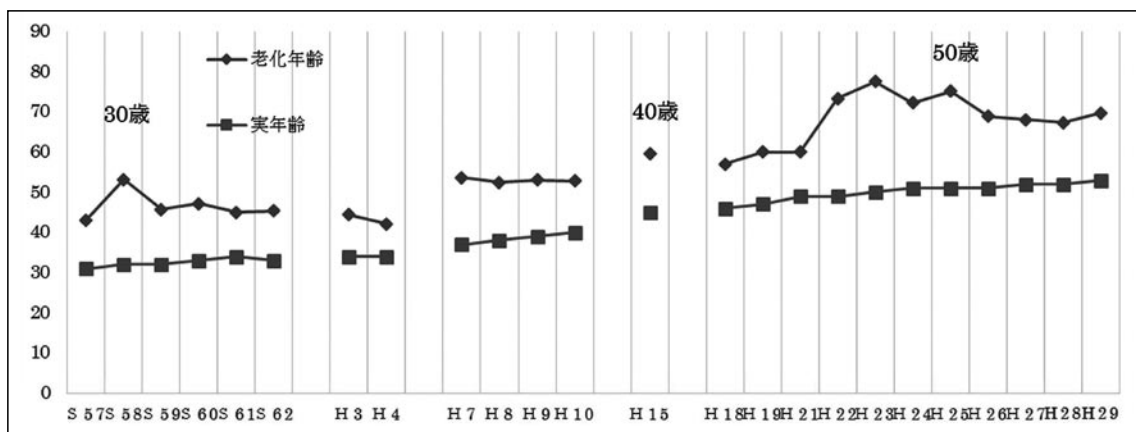


実際の検査の様子。歯の状態を見る

❸実際の検査結果

尼子式老化度測定検査は入所利用者全員を対象として実施し、全体の老化度、個別の老化度をデータ化し様々な角度から考察します。今回は全体の老化度の推移と、個別ではS・Hさんの30年の変化の様子をグラフから読み取っていききたいと思います。

①老化年齢と実年齢の全体平均



「働くことと生きること」

昭和49年～平成30年

通算45年の概要

昭和49年、東庄に開所した北総育成園。当時、近隣の農家さんから小さな畑をお借りして当園の百姓仕事が始まった。以後、少しずつ「働くことと生きること」「出番と役割のある暮らし」というものを整えてきた。農耕班と手芸班の2班のみで始まった作業活動も昭和51年に木工班、52年には陶芸班、54年は園芸班が設立。平成元年の増員・増築に伴い林産班と紙工芸班ができた。そして平成27年にありのまま工芸班が設立され今日の8班体制が確立。

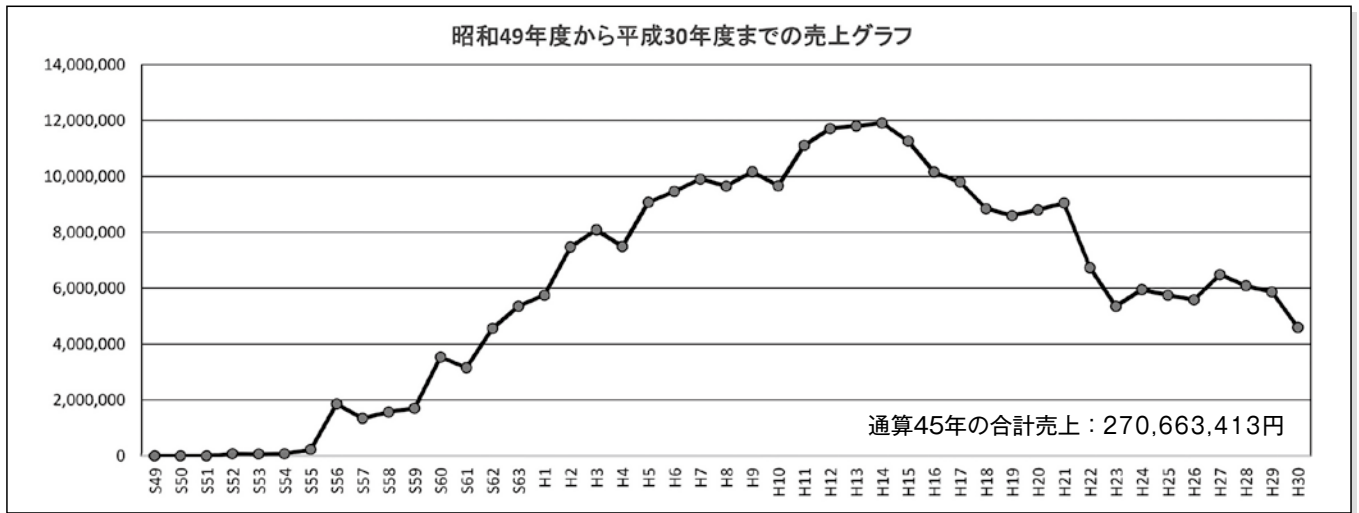
下のグラフは昭和49年～平成30年までの作業売上である。(昭和49年から3年間のデータは残っていない。)昭和50年代後半、北総の利用者の平均年齢もまだ20代。働く事の中でそれぞれが少しずつ自信をつけ、売上も右肩上がりに伸びていった。平成に入り25名増員し75名になつてからもその勢いは止まら

ず、平成9年には合計売上が初めて一千万円を超える。この頃は作業活動だけでなく、文化活動・自治活動も活発であった。平成7年には演劇芸座クラブが北欧デンマーク・スウェーデンに渡り公演。平成9年にはサイクリングクラブが房総一周を成し遂げる。平成11年にはハワイ旅行、平成14年には中国旅行へ。平成14年頃は作業活動も最盛期、合計売上が約一千二百万円を記録した。以後、少しずつ売上は減少。利用者の平均年齢も40代後半に差し掛かり、だんだん無理はできなくなり作業活動も縮小していく。それでも「働くことと生きること」にこだ

わり今日まで歩んできた。どんなに年をとっても作業場に来れば個々の仕事、やる事のある暮らしがあつて仲間がいて声をかけてくれる。もちろん喧嘩もある。3年前に設立されたありのまま工芸班。身体機能維持のためのウォーキング。歩く事も生きる事への経済活動。形・中身は変わっても、心根は変わらさずこれからも歩いていきたい。

(支援課長 猪田)

昭和49年度から平成30年度までの売上グラフ



太田三六 ひとり (135)



2月16日土曜日午後。予想もしていなかった事が起きた。中庭で飼っているアヒルのガーコちゃん、同じく北総の飼い犬、マユに襲われ怪我を負ったのである。何かの拍子に囲いの外に出てしまったマユが動き回るガーコちゃんを見て本能的に飛びかかってしまったようだ。お尻と首に傷を負ってしまったガーコちゃん。鳥専門病院に入院し治療、薬が処方された。温かい室内に住まいを移し、今後一カ月は看病が続く。

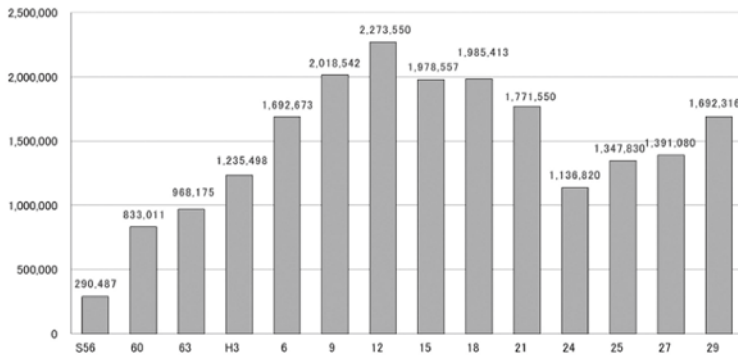
その報告を受け、武井園長が職員に話したこと。『当日勤務の職員が命を見捨てることなく、本当に良く手当てしてくれた。これから利用者の医療的なケア、介護に加え、動物のケアも業務に入ってくる。動物を飼っていないければこんな苦労をする事もないが、逆に動物を飼っていないければ経験できなかったこと。動物がいることで心が落ち着く利用者も多い。生き物こそ最高のオンブズマンと普段から話しているが、ガーコの回復がこの人々を大切にしてくれる力をつけてくれると考え、皆で協力して欲しい。最後にガーコちゃんに成り代わりましてお礼を言います。ありがとうございます。がんばろう！ガーコちゃん！』 (絵鳩)



▲「ガーコちゃんだいじょうぶ？」利用者のIさんが声を掛ける。H31.3.1

昭和56年～H29の売り上げグラフ(3年毎の抜粋)

農 耕 班



- ・ 設立；昭和49年（1974）
- ・ 主な仕事；無農薬野菜の露地栽培、ラッキョウ加工、切り干し大根加工
- ・ 主力製品；玉葱、大根、ラッキョウ漬け、葉物、姉妹施設長崎コスモス会から学んだ切り干し大根
- ・ 香取市岡飯田に1町5反の畑を有し、自然に抱かれ季節の野菜作りに励んでいる。

昭和49年。この地にお世話になるに際して「どう暮らしを立てるか」を話し合った。「百姓をやるしかあんめーや」。ご当地香取郡東庄町は千葉県を代表する米作、畑作地帯。手始めの畑に、大根、小松菜、ベカ菜、じゃが芋等。少しずつ力をつけて、安定して200万円以上を売り上げるようになった。大切にされ土など触ったことの無いこの人たちが、何時しか日焼けした顔、ごつごつした手。2町歩の畑の主となる。北総の新職員は先ず、農耕班で利用者に「共に生き、共に育つ」術を学び、この道に定着する。

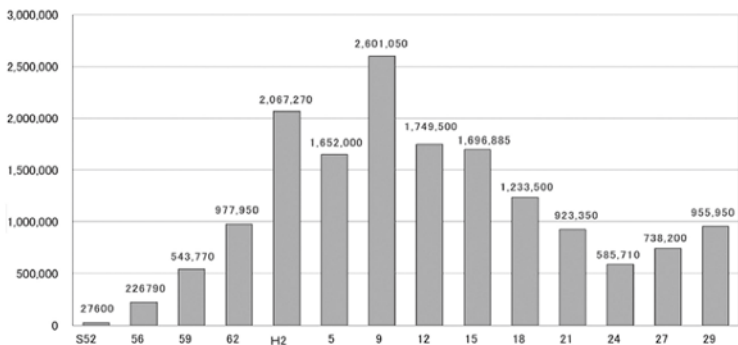
姉妹施設、長崎コスモス会から教わった「切り干し大根」は、本当に評判が良い。

そして、皆、歳を取った。農耕の仲間は次々リタイアしていった。が、もう少し頑張ろう。



昭和49年～H29の売り上げグラフ(3年毎の抜粋)

手 芸 介 護 班



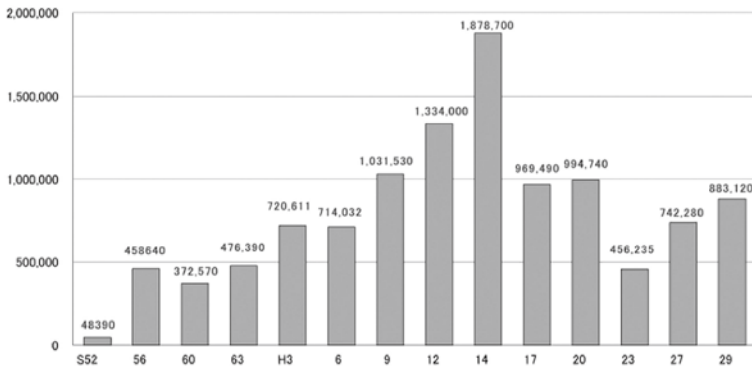
- ・ 設立；昭和49年（1974）
- ・ 主な仕事；しつけかけ、しつけ取り、工業用マシンでの裁縫、刺し子、結び織り
- ・ 主力製品；バック、エプロン、刺し子製品
- ・ 製品には必ず利用者の手仕事が入っており、市販の物より丁寧で丈夫な作りとご好評頂いている。一人の利用者の手による刺し子を大切にした製品は素晴らしい。

手芸班の歴史は昭和49年開所の北総の歴史と重なる。当時、男は外で畑仕事、女は中で針仕事。それが手芸班の源流。当初は売れるような製品が生産される仕組みではなく試行錯誤の時代。が、この昭和49年から手芸班一筋の人たちが40年間手芸班に籍を置き、その後260万円を稼ぐ時代を担ったのだ。売り上げを伸ばそうと当時の職員は必死になって夜なべ仕事。すると、栄子さん、まさ子さん、秋山さんが手芸室に顔を出し仕事を手伝ってくれた。そんな話を当時手芸班だった白樫副園長から聞いた。その人たちは今、北総にはいない。元々高齢の女子利用者が多かった手芸班はH20年を過ぎた頃から益々高齢化が顕著となり、介護度の高まりから「手芸介護班」に名前を変える。利用者は思うように動かない体となっても、長年続けてきた自分の仕事に毎日一生懸命に向かっている。そんな姿に寄り添いながら、私達職員も共に働いていきたいと今、改めて思う。



昭和52年～H29の売り上げグラフ(3年毎の抜粋)

木 工 班



- ・ 設立；昭和51年（1976）
- ・ 主な仕事；杉の焼き板や瓢箪、花台磨き
ロクロによる製品作り
- ・ 主力製品；焼き板の鍋敷き、天然木の花台、
お盆などのロクロ製品、瓢箪飾り
- ・ この人たちは磨き職人。天然木を焼きそれを磨く。

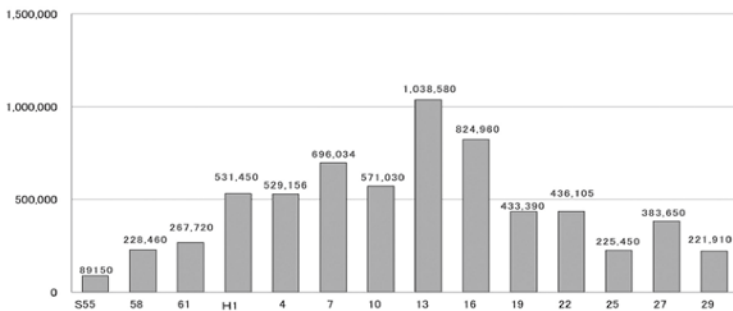


“焼き板磨きは”この人たちの心を琢み続けた。

銚子に程近いこの辺りには、漁港に水揚げされた魚を入れる木の箱作りが一つの産業として成り立っていた。当初その箱作りを頼まれたのだ。これはしかし、一年程で止めた。利用者には無理な仕事であった。次に辿り着いたのは焼き板磨き。これは当時の養護学校作業教育で多くの学校が取り組んでいたこと。木目のきれいな杉板をトーチで焼いて、その炭を落とすと木目が浮き出る。魚や動物の形に整える。ヒット商品は①郵便受け②鍋敷。当初は短時間で仕上がるような安易な物だったが、利用者は磨き力がついて大物に挑戦。その木目の由来をお客さんに説明する。感動して、早速、500円のこの焼き板を土産にしてくれた。磨いた本人は鼻高高。この磨きに向き合って40年。心を琢み続けたこの人たちである。

昭和55年～H29の売り上げグラフ(3年毎の抜粋)

陶 芸 班



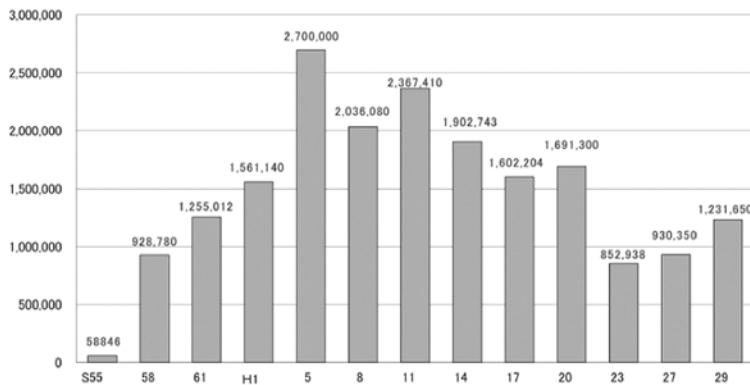
- ・ 設立；昭和52年（1977）
- ・ 主な仕事；手びねりの花生け作り、箸置き、
干支人形の制作、ロクロによる製品作り
- ・ 主力製品；ハゼの箸置き、花活け、干支人形
ロクロで引いた茶碗、湯呑み
- ・ 一人ひとり粘土に向き合い、世界に一つしかない
オンリーワンの製品を作っている。



陶芸班で忘れてならない人は稲吉さん。陶芸も全くの素人であったが研究熱心で創意工夫する力があつた。昭和50年、先ず、陶芸作業場が園庭の片隅に確保された。庭は土手を背負っていて、その土手に手作りの陶芸窯を誰も頼らずに作り上げた。粘土は園周辺の砂取場の粘土層の粘土に着目。決して質の良い物ではなかったが、その粘土から最初の製品が生まれた。鈴木一夫くんや阿部信一さん等と苦労してくれていた稲吉さんの姿が思い浮かぶ。40年という歳月は陶芸班一つとっても十年一昔の四昔。小さな仕事場であったが、その間、多くの職員が苦労を継続してくれた。陶芸班の長い歴史の中で、現在まで脈々と受け継がれているのが「三番瀬のハゼの箸置き」である。陶芸班に配属となった利用者、職員誰もが経験する仕事である。一匹一匹、手作りしたハゼは皆表情が違う。それは細いひも状に伸ばした粘土を積み上げ作る花活けも同じで、指の跡が皆違う。それは世界にたった一つしかない作品なのだ。が老いは厳しい。この先、何年続けられるか……。

昭和55年～H29の売り上げグラフ(3年毎の抜粋)

園芸班



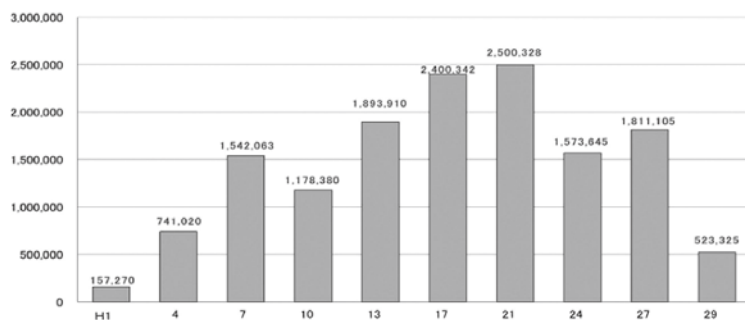
- ・ 設立；昭和54年（1979）
- ・ 主な仕事；大型フレームで季節の草花の栽培
園内の花壇の管理、野の花広場の環境整備
- ・ 主力製品；シクラメン、朝顔、サイネリア
- ・ 大型のガラスフレームを2棟所有し、様々な季節の草花を生産。園内の花壇の手入れや、野の花広場の環境整備も担当。

農耕班から分離独立したのは昭和54年のこと。当たり前のことだが当初は、小さなフレームの中のままごと仕事。が、次第に拡大路線に乗る。多くの利用者は船橋市の人。保護者は船橋市民。その背後に善意の無数の都市消費者がいた。また、香取のこの地はシクラメン栽培が盛んであったこと。その農家が力を貸してくれた。今は園長補佐の城之内を中心に園芸班職員も必死でその栽培技術を学んだ。バブルの頃はシクラメンが高く売れた。270万という数字が懐かしい。景気低迷で昔の勢いは無いが、二十年後の今もそのシクラメン農家が助けてくれる。毎年七月に朝顔、十一月にシクラメンを船橋市長さんにお届けする。この機会を励みに職員は毎年いい花作りを心掛けている。



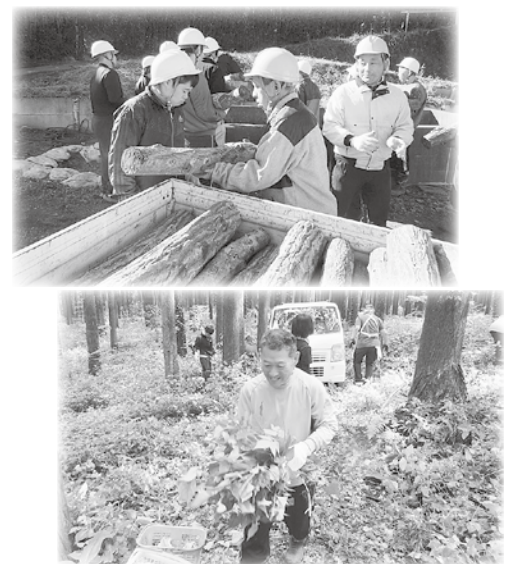
平成元年～H29の売り上げグラフ(3年毎の抜粋)

林産班



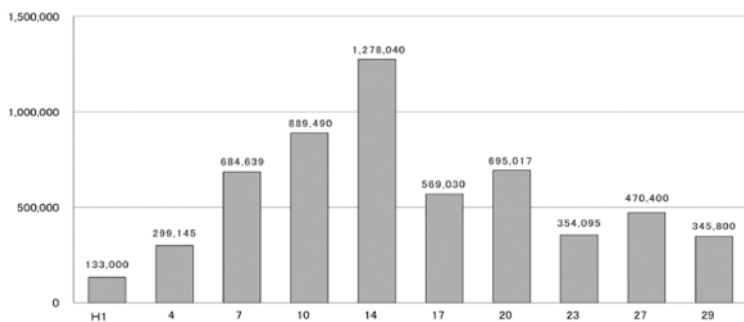
- ・ 設立；平成元年（1989）
- ・ 主な仕事；原木椎茸の栽培、ドクダミ茶作り
貯木場の整備
- ・ 主力製品；原木椎茸、ドクダミ茶
- ・ 檜の木の原木から椎茸を栽培。林産班の仕事は原木運び。重い原木を黙々と運ぶその姿は何よりも尊く、たくさんの事を教えてくれる。

平成元年より始まった林産班。開始当初はドクダミの売り上げだけだった。ドクダミ採りの起源は武井園長が農耕班時代に香取地域にドクダミの群生地が多い事から利用しない手はないと始めたものがきっかけ。現在では、沢山のボランティアさん、保護者にご協力を頂きながらの大切な北総の一大産業。そして、林産班利用者・職員にとって誇れる仕事として成り立った。椎茸栽培はH2年より開始。フレームの温度管理や原木の水分管理が難しくなかなか売りに繋がらない時代もあったが、種菌会社さんにもアドバイスをもらいながら試行錯誤を重ね、発生量、売り上げも安定してきた。林産班には強度行動障害を持つ利用者も多い。しかし原木運びの仕事になると皆黙々と取り組み、障害の重さを感じさせない。それは歴代の職員が、原木運びこそこの人たちの可能性を最大限に伸ばす仕事と捉え、共に汗を流すことにこだわったからだと確信している。2011. 3.11の東日本大震災で原木からセシウムが検出され辛い体験をしたが、それも乗り越えた。



平成元年～H29の売り上げグラフ(3年毎の抜粋)

紙工芸班



- ・ 設立；平成元年（1989）
- ・ 主な仕事；楮の栽培、楮たたき
- ・ 主力製品；手作り和紙製品(栞、はがきなど) 干支人形

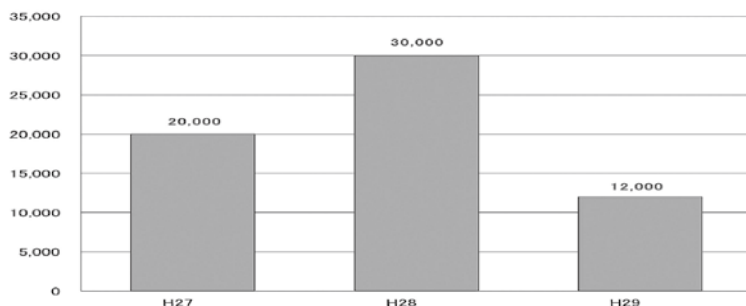
・ 和紙の原料となる楮から自分たちで栽培。日本の伝統工芸として伝わる和紙作りの手法にこだわっている。



紙工芸班の創設は増員増築をした平成元年。新しく仲間となる利用者と何をしようか？思いついたのは水上勉さんの話から。水上さんの生まれ在所、福井県若狭地方には地場産業として越前和紙があった。当時、県内の施設でも牛乳パックから紙を作る所はあったが、せっかくやるなら本格的な和紙作りにこだわろう。和紙の原料となる楮も自分たちの手で育ててみよう。そんな思いで始まった紙工芸班。和紙作りの工程で一番要となるのが楮叩き。その楮叩きを担うのが利用者。トントントントン、木槌で叩く。もちろん最初から根気よく出来たわけではない。何度木槌を置いてしまっても諦めず一緒に手を添えて叩く。木工班が磨き職人なら、紙工芸班は叩き職人。いつしかそれぞれが職人の顔になってきた。職員は近隣の和紙工房を訪ねプロの技術を学び、この人たちの小さな仕事に付加価値を付けることにこだわった。北総和紙で作った干支人形は紙工芸班の誇りである。が、製品作りと売り上げは右肩上がりとはいかないのが現実である。

H27年～H29の売り上げグラフ

ありのまま工芸班



- ・ 設立；平成27年（2015）
- ・ 主な仕事；ウォーキング、瓢箪磨き
- ・ 主力製品；瓢箪飾り

・ 北総で一番新しい作業班。その人の「ありのまま」を受け止め、謙虚な気持ちを持って、共に歩き、共に瓢箪を磨く。



加齢による介護度の高まりを受け、外作業班での仕事が困難になった利用者を受け入れる班として平成27年に新設されたありのまま工芸班。ありのまま工芸班の仕事はその人の「ありのままを受け入れること」。まずは一人ひとりの健康管理が第一。その健康管理の一環で取り組んでいるのがウォーキング。ウォーキングは一人ひとりのペースに合わせながらも、必ずその時間を確保して行っている。そして万歩計を付けて歩く事にこだわる。「働く」ことは経済活動。ありのまま工芸班もそれは同じこと。万歩計を付けて歩数と距離を毎日記録し、グラフ化してその人の頑張りをきちんと評価する。ウォーキングの他に取り組んでいる仕事が「瓢箪磨き」。この「瓢箪磨き」は志賀直哉の短編「清兵衛と瓢箪」がヒント。瓢箪磨きの仕事は単調な仕事だが、磨けば磨くほど艶が出て良い風合が生まれる。まだまだ試行錯誤の繰り返しだが少しずつものになってきている。今後のありのまま工芸班に乞うご期待！

街道をゆく 139

去る1月30日〜31日、「第7回障害者支援施設部会全国大会 東北地区岩手大会」に参加した。全体会の中では東北大会ということで東日本大震災の復興報告があった。その中で特に印象に残ったのが、地震の被災だけでなく原発事故による甚大な被害を被った福島県の報告であった。

報告の中で具体的な数字を用いて説明して下さったが、その数字がまさに福島県の苦しみを物語っている。まずは東日本大震災における死者数。全国で15,895人、岩手県4,673人、宮城県9,540人、福島県1,614人(2018.3.9復興庁)。この人数は津波や強い揺れにより倒壊した家屋の下敷きになるなど、地震による現象で亡くなった方の人数である。しかし、東日本大震災で尊い命を失ったのはこれだけではない。「震災関連死者数」と呼ばれるものである。

人(2018.3.31復興庁)となっている。福島は被災三県と言われる岩手、宮城より断トツに数が多い事がわかるが、それにも増して驚いたのは地震によって尊い命を落とした人数1,614人に対し、震災関連死によって尊い命を落とした人数が2,227人と上回っていること。

この数から、いかに震災以降も福島の方々の生活が過酷であったかが想像ができる。その中には自殺によって命を落とされた方もいたと言う。傍から見れば「なんであの地震で助かったのに自殺なんて……」と思ってしまう自分がいるが、そこは当事者でなければ絶対に理解できない苦しみがある。それ程までに原発事故がもたらした闇は深いのだと思う。

また原発事故によって故郷を追いやられ県内、外に避難した市町村(楢葉、富岡、大熊、双葉、浪江、葛尾、飯館)の住民基本台帳上の人口61,373人(2018.11.1)に対し、避難が解除され帰還した人数は4,052人(2018.3.4)と帰還率は僅か6%と言う現実。慣れ親しんだ故郷に帰らず、新しい地でこれからの人生を送ることを決めざるを得ない福島の現実。福島第一原発を廃炉にするのに、後何年かかるか今の技術では全く見当がつかないのだと言う。政府は2050年を現段階での廃炉完了の時期としている

が、それはあくまでも「一応、その辺りでは……」と置いているだけであって実際はその道筋も確実なものではない。

あの震災から今年で8年。福島の今を教えてくださいと福島の知的障害者福祉協会会長の古川氏が話された言葉。「あれから8年。今もなお続いている福島の現状がメディアの話題になるのは年に一回、3月11日だけ」。これは私たち日本人全員に突き付けられた課題であろう。沖縄の米軍基地の事もそうだが、こんなに狭い日本の中のことなのに、当事者でないという事だけでどこか無関心な自分がある。この報告を受けて改めてそうではいけないと思うし、何か自分のできる事があれば実行しなければと思う。(絵鳩)



▲作業班旅行で4年ぶりに福島県いわき市を訪ねた。海岸線には新たに防潮堤が築かれていた。後ろに塩谷崎の灯台が見える。H31.2.17

ちよつと一息

土寸のコーナー

「大北総」

北総は 共に生き

共に働き

共に笑む

たまには 泣いて

叫んで

暴れよう

北総は 皆を助け

支え

守る

最期まで一緒に過ごそうよ

終焉しても北総は続く

一人じゃないよ

大北総がそばにいる……

大北総が語り継ぐ……

決して忘れ去られる事はない。

安心して共に老いていこう……。

(桜井)

食いしんぼう

朝昼夕と

メニュー聞く

(小林)



みんなの広場

■働くこと生きること

私は今年たんぼぼ寮居室チーフを初めて務めさせていただきました。まだ3年目……。自分にできるのかと不安もありました。そんな中、この一年たんぼぼ寮では、利用者さんの高齢化、老いを痛感する場面がた

と現在入院中の方がいらつしやいます。2人とも作業も同じで関わりの多い方でした。ついこの間まで一緒に作業をしていたのに……。という思い。体調を崩され、作業はできる状態ではなくなり自室での生活。私は「担任としてできることは何だろう」と考える日々……。しかし答えは分かりませんでした。

ある日の出来事。Hさんの食事介助に入った際に、ふいに「ありがとうね」と言われました。「私は一人で食べれないから」と。その時私は、特別何かをするのではなく、この人たちと一日一日を一緒に生活していくことが大切なんだと実感しました。私たちが支援として行っていることは、直接命にも関わってくる

こと。日々の何気ない会話やあいさつが大事だということ。たんぼぼ寮の皆さんを見て学ぶことが多い一年でした。



「働くこと生きること」は、働いている時間があったからこそ生きていく活気につながる。とも思いました。2人が携わった作品は多くあります。一緒に作業ができたこと。生活をしていたことを心に留め、私自身も成長していけたらと思います。

■いらつしやいませ!

(西村)

私は農耕班に所属しているのですが、収穫した野菜は販売品として準備をすることはあっても、実際に町の人に販売するといった経験がありませんでした。しかし、ほんの少しですが私も小見川販売に参加させていただく機会がありました。小見川販売では、農耕班は切り干し大根、さつまいも、ソルムラサキの3品を出品していました。私は途中から参加し、既に朝から販売していた先輩職員の方々と「いらつしやいませ」と声出しをしました。すると、すぐにお客さんが寄ってきてくれ、農耕

編集後記

早いもので今年度も3月を迎えました。2か月後の5月には元号が変わるということで、「平成最後の……」というフレーズをテレビ等でよく耳にします。この広報紙「北総の里」も今号が平成最後の発行になるかと思えます。

さて、今号では特集「これから5年後の北総」と題しまして、高齢化が顕著となった北総のありのままの様子を尼子式老化度検査、作業の歴史から検証しました。年老いた今の姿だけを見るのではなく、元気に活躍していた時代があってこそ今の今だということをしっかり心に置いて日々の支援に当たることが、これからもっと大変になるであろう介護を謙虚な気持ちで行なう為の土台になるのだと思えます。

西暦で言えば今年は2019年。いわゆる「2020東京オリンピック」までいよいよあと1年。この「2020年東京大会」は「復興オリンピック・パラリンピック」と位置付けられています。でも、実際に私たちはその思いを持っているでしょうか。もちろん選手の皆さんの活躍を期待していますが「街道を行く」で触れた福島の現実を思うと、ただお祭り騒ぎで終始するオリンピックであってはならないと思えます。(絵鳩)



班の野菜を見て「安いわね、夕飯に買うわ」と言って買ってくれました。職員と利用者で頑張って収穫した野菜を、実際に町の人が買って食べてくれることに喜びを感じました。販売に参加していなかったら、この喜びは感じられてないと思います。これからも美味しい野菜を提供できるように、引き続き頑張っていこうと思えました。

■食でつながる

(大川)

朝の「おはようございます」から始まり、「今日の夜は何?」「おいしかったよ」と、入職してから少しずつコミュニケーションが取れるようになって

りました。「美味しかったよ」という言葉がうれしく、とてもやりがいのある仕事だなと感じています。

私は年間通して全国の色々な所に一人旅で行ったりするので、全国の色々な地方で食べた名物や美味しかったものを、なかなか外に出かけて食べるのでできない利用者さんにも食べさせてあげたいなと思うようになりました。同じ食材でも調理の仕方などで、見た目も味も変わるの、とても勉強になります。食を通じて、もっと喜んでもらえるように勉強したいと思えます。

(厨房 菅谷)